て鮮かになりまして、女眞の風を捨て、支那文明を吸收すると云ふことが盛んになつて來た、それから廢帝亮と云ふ四代目の天子がある、此人は有名な詩才を備へた人で、南の宋を攻めるために宋の杭州の地圖を書かせ、その地圖の上に題した詩の如きはよく人口に膾炙されて居るものである。一つ飛びまして第六代目の章宗と云ふ天子は甚だ能文家として前の廢帝亮と並び稱へられる人である。かくの如く上の天子が既にかゝる有樣であるから、金の一般の人達が漢文明を好んでそれに悅んだと云ふことは非常なものでありまして、個人の姓名の如きでも金の名前を止めてしまつて支那の名前をつける、當時の歷史を御覽になりますと有名な人は皆二つの名前で現はれて居る、支那に交渉があることについては支那の名前を用ゐ、自分の國內に關したことについては女眞語の名前を用ゐて居りますが、兎に角支那の人の名前を皆が用ゐると云ふまでに支那化したものであります。

三

元の朝廷のことは後に申上げる事として、清朝になりますれば、これは申上げるまでもなく最近のことゝして御承知の通りで、滿洲人も支那人も全く異るところなきまでに支那化されてしまつた樣である、既に早く康熙、乾隆諸帝の如きも自ら儒を以て處つた人であつた、自ら發意していろ〳〵重要な大きな書物を編纂し、支那文明史上に大なる手柄を立てたことは周知の事である。

斯う云ふ譯で北方から起つて多少とも支那を支配した民族は、みな支那文明に同化されてしまつたのである。併し氣をつけて見なければならぬことは、此等の朝廷は必しも自分で進んで支那の文明を導き入れて、自分の個